

05-1 課題指向型アプローチを実施し、ボタン着脱が可能となった症例

○早川 文生(OT)

医療法人仁寿会 石川病院

Key word：頸髄症、知覚運動アプローチ、把握動作

【はじめに】近年、脳卒中患者に対する課題指向型アプローチの効果が多く報告されている。脊髄脊椎疾患における課題指向型アプローチの報告は少ない状況にある。今回、頸椎症性脊髄症により巧緻動作障害、感覚障害を呈した事例に対し、課題指向的な巧緻動作訓練、知覚識別課題を併用した結果、事例の目標であるボタン装着動作の獲得に至ったため報告する。

【症例紹介】60歳代男性。頸椎症性脊髄症。2年前より両手指痺れあり。3ヶ月前に巧緻動作障害、歩行障害が出現し、頸椎 OPLL に伴う頸椎症と診断された。経過観察で症状悪化したため、頸椎椎弓形成術(Th1～C7)が施行された。20病日後に当院転院し、翌日より回復期 OT を開始した。

【倫理的配慮】本報告を行うにあたり、症例本人に口頭で説明し、本報告以外で使用しないこと、それによる不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得た。

【初期評価】JOA score11/17点。NCSS3-2-2-B. 握力右23.7kg, 左12.4kg。左手触覚4/10。運動覚9/10。立体識別覚検査材質識別不可。異常感覚(NRS)6/10, 冷感あり。STEF 右80/100点, 左51/100点。MAL 左手(AOU)1.0, (QOM)0.7。FIM96/126(mFIM66/91)。COPM(1)左手で食器を把持して食事, 遂行度3/10, 満足度3/10。(2)シャツのボタン着脱, 遂行度1/10, 満足度1/10。

【経過】異常感覚軽減を目的に持続的な感覚刺激の入力を行った。また介入初期に ADOC for Hand を用い ADL へ反映できる課題の抽出を行った。36病日目に両手での洗髪動作, 左手で食器を抑えることが可能となった。しかし感覚低下が残存し, 手のフォーム形成と把握力調整不良があり, 食事を通した食器の把握が困難であった。そのため材質の異なる物品の識別課題や複数の感覚刺激の中での探索識別課題を, 能動的かつ段階的に実施した。また小物品の把握, 運搬動作

を課題指向型アプローチとして行った。55病日目, 立体識別が可能, 異常感覚は1/10, STEF(左手)が74点まで改善し, 左手で食器を持って食事が可能となった。ボタン着脱動作も獲得に至ったが, ボタンの装着, シャツの着衣に時間を要し, 遂行度に課題が残った。この課題に対し, 巧緻動作における手関節背屈筋, 手内在筋の持久性低下が原因と考え, 手関節背屈位でのピンチ動作, 手内操作訓練と, ボタン装着の実動作訓練を実施した。その結果, ボタン装着時間の短縮が図られ, 外泊中の73病日目に自ら礼服の着用ができたと報告があった。

【最終評価】JOA score14/17点。NCSS5-4-3-E. 握力右27.5kg, 左18.1kg。左手触覚10/10。立体識別覚検査材質, 物品の正答可能。異常感覚3/10, 冷感なし。STEF 右88/100点, 左79/100点。MAL 左手(AOU)4.5, (QOM)4.1。FIM123/126(mFIM89/91)。COPM(1)左手で食器を把持して食事, 遂行度8/10, 満足度8/10。(2)シャツのボタン着脱, 遂行度5/10, 満足度5/10。

【考察】本症例は識別能力低下により, 過剰な緊張が生じ, 把握力調整が困難となっていた。中田は「物質の性質を知るための適刺激を作り出しているのは, 自らの手の動きである。したがって, 特定の受容器の興奮を起こすための能動的な動きが必要である。」と述べている。能動的な探索課題を繰り返し行ったことにより, 体性感覚を受容しやすい動作が可能となり, 把握力調整の改善に繋がったと考える。岩村は「体性感覚フィードバックは, 定常の出力を維持すること, 負荷の変動に対処すること, 運動遂行時のエラーを検出して正すことのために使われる」と述べている。改善した識別能力を用いて体性感覚フィードバックを受けながら, 課題指向的な道具を使用した巧緻動作練習を実施したことで, 使用依存的な再学習の促進が図られたと考える。